本紙は女性による平和と平等を推進します

回覧

発行所
全国婦人新聞社
〒160本社東京都新宿区西新宿
3-7-28　宝幸西新宿ビル
電話　03(343)1846(代)
FAX　03(348)1890
振替口座　東京(5)172320

全国婦人新聞

ご購読料
1年　4,500円
(郵送料900円を含む)
現金・切手・振替で前納
月3回発行
10日・20日・30日

《品質本位》のうすくち
ヒガシマル醤油
＊ヒガシマル醤油株式会社

女性にとっては性的差別問題も

拘禁二法は人権侵害だ！

えん罪の温床許すな

女性弁護士四百十五人、アピールと懇談会

島田事件、熊本の婦女暴行事件の再審で、三十四年ぶりに無罪がいい渡され、注目を集めたばかりだが、えん罪の温床となっている警察の留置場（代用監獄）を恒久化する拘禁二法案がいま国会審議中である。消費税がすんだあと、一気に拘禁二法を通してしまおうという気配もある。この法が通ったら二大事、国民の人権の侵害であり、特に女性にとっては、性的差別をうけ深刻な問題であると、このほど女性弁護士四百十五人は、「拘禁二法に反対する女性弁護士のアピール」を発表、一月二十七日午後、第一弁護士会館で、なぜいまアピールを出したか、懇談会を行なった。

懇談会では女性弁護士たちを代表して井田恵子さんから「拘禁二法は代用監獄の永久化であり、弁護人との接見も制限される。特に女性の場合、看守も警官も女性が少なく、男性による性的いやがらせなどの事件がおきている」と、わが国の前近代的「人権後進国」の実態と問題点の説明があり、アピールに具体的事例としてとりあげられた、長野の全裸・強制採尿事件、三島署内・強姦類似猥せつ行為について、地元の弁護士から説明があった。

長野の事件は昨年二月におこったもの。深夜無免許運転で逮捕された女性A子さんは、事実を素直に認めているのに、全裸にされ、生理中だったのにタンポンまでとられ屈身運動をさせられた。その夜は採尿を断わったが、翌日昼前、規則だからと理由の説明もなく、採尿を命じられた。トイレの戸はあけたままで女性の職員がすぐそばにおり、男性がすぐそばで行き来するのも見えた。

この事件はいま賠償訴訟中だが、その後地元紙が、長野県警では覚醒剤の検挙率をあげるため、全部の留置人に採尿検査をしているという事実をすっぱぬいた。そこで弁護士会が、覚醒剤容疑でなくて警察に留置された人にアンケートをとったところ、二十四人から返事が来、二月二日から三月二十日までは五〇%の人が、一月～三月までの三カ月間をみると三〇%の人が強制的に採尿されていた。うち目的を告知されたのはたった一人。あとは理由もいわず、全裸にして調べていた。

警察は、A子さんを自殺予防のため全裸にしたと主張しており、態度がおちつかず顔色も悪かったので…といっているが、A子さんには注射のあともなく、覚醒剤の前科もない。A子さんがスナックの経営者で内縁の夫があり、はじめからうたがっていたらしい。また、全裸にしたことについて、施設の管理権などといっているが、なにが管理やら少しもはっきりしない。

三島の事件は、昨年六月、男性看守が女性留置人二人に対して行ったもので、起訴された看守自身も事実を認めている。深夜に差入口から手をいれ、下着をおろし身体にさわるといったことを何度もしたあげく、しまいには留置場内に入って来てわいせつ行為をした。三島署は女性看守もおらず、夜は男二人で勤務、一人は仮眠するので、〝やり放題〟。留置場内でこんなことがあっては女性は逃げ場もないわけだ。

東京の警察は、女性専用の留置場をもっているところもあるが、地方などではほとんどない。そのため留置された女性は警察のひどい取り調べのほかに留置されて、男たちからひわいな言葉をあびせられることもある。これが拘置所なら男女が分離されており、女性看守もいる。

さらに一昨年の夏、石神井署に逮捕され屈辱的なしうちをうけ、その事実を勇敢に告発しつづけている手塚千砂子さんが、事実を訴えた。手塚さんは女の職員に身体検査された。髪の毛のゴムもとられ、手を入れてかきまわすので髪がモシャモシャになった。それから上半身裸にし、手を上にあげぐるっとまわれといい、つぎにこんどは下半身裸にされ、足を開き屈身させられ、そのまま跳べという。実に屈辱的だった。手錠、足なわで警視庁につれて行かれ、また身体検査をするという。もう石神井署で検査したのにどうしてもう一度、といったから、男の看守が目をつりあげもの凄い剣いでとなりつけ、だまらざるをえなかった。

また上半身、下半身とわけて裸にし、ジロジロ見て身体に傷などあると記入している。上半身、下半身、半分ずつ裸にするのは、全裸ではないといういいわけのようだが、全裸以上にいやだった。

留置場で、ほかの女性にも体験を聞いてみたが、交通違反の人も含めて全員が同様の検査を受けていた――。

出席の弁護士例から、大人以上に〝少年〟の方がひどい扱いをうけている。大人の場合は私費か国選かの差はあっても一〇〇%弁護人がつくのでチェックできるが、少年の場合、弁護士がつくのは千件中六件くらい。なぐったりけったりして自白をせまることが多いが、ほとんど明るみに出ない。〝非行少年〟という先入観があるため警察はやたらになぐる。

大人の場合でも、政治的な確信犯は別として、ふつうの場合、つかまった人は一応弱みを持っている。特に女性の場合、性的な侮べつを受けたなど恥ずかしくていえないということもある。また、国選弁護人がつく場合は、起訴になってはじめて弁護士がつくわけだから、弁護士でも警察署内のこうした実態はつかみにくい。

留置場では、〝被疑者に人権はない〟のが実態である。これが無数のえん罪を生み出す。女性の立場から、女性弁護士は拘禁二法に絶対に反対する、と訴えた。

懇談会で問題点を説明する女性弁護士たち

実態と問題点追及

体験者の告発を聞く

反対する連絡講座　今ケーサツがこわい

一月二十五日には、東京・市ケ谷の日本YWCA会議室で、拘禁二法に反対する連絡講座「今ケーサツがこわい」（主催・「国家秘密法」に反対する市民ネットワーク）が開かれ、〝体験者の告発シリーズ〟第二回として、統一獄囚者組合の安島あじま敏市さんが「〝塀〟の中の二十四時間」と題し、〝塀〟の中の実態を話した。

安島さんは、七五年、爆発物取締罰則違反で逮捕され、十一月に東京拘置所に移管された。懲役五年が確定し、八一年一月から、東京・府中刑務所に服役、刑期の残りの二年半〝塀〟の中の生活を体験した。

安島さんの語る、〝塀の中〟（府中刑務所）の一日とは――。

起床、点検。「点検」というのは、顔写真、経歴等が書かれた帳面をもち、看守がチェックを行うことで、獄囚は正座し「〇〇番（称呼番号）オハヨウゴザイマス」と言わされる。「大体〝点検〟という言葉自体が、人を物扱いしている言葉だ。正座はお上に対して上下座するという図式で、屈辱的……」

安島さんは、東京拘置所にいた時から正座で〝点検〟を受けることを拒否しつづけ、府中刑務所でも三カ月ごとまとめて何日かの懲罰をかけられた。

朝食は、最も良い一等食から五等食まで。食事は、床上数センチの穴から食器が出し入れされ、不衛生だ。朝食がすむと工場へ出役する。工場は、製本、プレス、木工、写植、自動車整備などに分かれており、ブロックごとに整列、点呼が行われ、工場へ連れて行かれる。

着換え室では舎房用の衣類をすべて脱ぎ、まっ裸で両手、両足を高く挙げて、看守にみせてから工場服に着換える。

「この〝儀式〟が朝夕二回。格好が似ていることから私たちは〝カンカン踊り〟と呼んだ。初めは屈辱感があったが、慣れると平気になった……」

作業は、午前に五分、昼に三十五分（含昼食）の休けいを含み三時半頃まで。トイレは工場の片隅にあるビニール張りの囲いの中。中は丸見え。「当時は、作業中の用足しが許されたが、今はできなくなったようだ。管理が厳しくなっている」

天気が良く、入浴のない日は運動することができた。運動場への往復は〝軍隊式行進〟で。入浴は、一人約十五分位。横四列に並んで、看守の合図に従って入る。そのあと房へもどり、夕食のあと九時の消灯までが自由時間。寝る時は、ふとんをかぶって寝ることは許されない。

規律に違反すると、監獄法に定められる「軽塀禁」「文書図画閲読禁止」「運動の百日以内停止」などの懲罰がかけられる。また、何か〝コト〟を起こすと、コンクリートに囲まれた通称「ビックリ箱」と呼ばれる狭く暗い部屋に入れられ、反省させられる。「ビックリ箱」は法令によらず処罰が行われる場所と考えてよい。

「寒い時期に朝から晩までこもったもの。深夜無免許運転で逮捕された女性A子さんは、事実を素直に認めているのに、全裸にされ、生理中だったのにタンポンまでとられ屈身運動をさせられた。その夜は採尿を断わったが、翌日昼前、規則だからと理由の説明もなく、採尿を命じられた。トイレの戸はあけたままで女性の職員がすぐそばにおり、男性がすぐそばで行き来するのも見えた。

この事件はいま賠償訴訟中だが、その後地元紙が、長野県警では覚醒剤の検挙率をあげるため、全部の留置人に採尿検査をしているという事実をすっぱぬいた。そこで弁護士会が、覚醒剤容疑でなくて警察に留置された人にアンケートをとったところ、二十四人から返事が来、二月二日から三月二十日までは五〇%の人が、一月～三月までの三カ月間をみると三〇%の人が強制的に採尿されていた。うち目的を告知されたのはたった一人。あとは理由もいわず、全裸にして調べていた。

警察は、A子さんを自殺予防のため全裸にしたと主張しており、態度がおちつかず顔色も悪かったので…といっているが、A子さんには注射のあともなく、覚醒剤の前科もない。A子さんがスナックの経営者で内縁の夫があり、はじめからうたがっていたらしい。また、全裸にしたことについて、施設の管理権などといっているが、なにが

不安な食べ物がチェックできる

直接請求運動

食品安全条例案を発表

条例（案）の内容を説明する神山美智子弁護士

不安な食べ物がチェックできる「食品安全条例」を、住民の直接請求で作ろうと、四日、東京・四ツ谷の主婦会館で、同条例（案）の発表が行われた。

チェルノブイリ原子力発電所の事故による放射能汚染食品、放射能照射食品、食品添加物食品、ポスト・ハーベストの不安のある輸入食品と、市民の食に対する不安が高まっているが、条例（案）は、こうした不安を取り除くため、消費者の権利、事業者の責務、自治体の役割を三原則に、①健康を損なう疑いのある食品について、都民は都知事に申し出ることができる。②知事の諮問機関として、消費者が参加する食品安全委員会をつくる。③安全な食品を推奨する制度をつくる。④知事は安全性が疑わしい物質を事業者が提供することを停止するよう勧告ができる。また、安全性が疑わしい物質を学校給食などから追放することができるという、四つの機能を持っている。

直接請求を起すには、有権者の五十分の一の有効署名が必要で、三月十五日にスタートし、二十万人の署名を予定している。

運動を進めるのは、「東京・食品安全条例をつくる会」で、生活クラブ生協（事務局☎03・425・0111）、日本消費者連盟、生活協同組合Eコープ、小児科の毛利子来さん、音楽家の小室等さんなど百一の団体（人）が呼びかけ人になっている。

また、三月十一日に、「食品安全条例をつくるスタート集会」が、東京・自治労会館で開かれる。

婦人手帳

☆★☆いやな言葉もつかっていれば馴れてくる。あまり気にもならなくなっていたが、〝賢人会議〟というのはどうにも頂きかねる。自分のことを〝賢人〟といわれて、ハイそうですかという人の神経がどうにも私にはわからないが、これは、私たち、愚者・凡人の知恵の至らなさ、ですかな。

★☆★〝賢人会議〟というのは俗称で、有識者ナントカ、というものだそうだが、有識者というのもヘンな言葉だ。有識者じゃない人は無識者？そういえば、文化人というのもずい分思いあがったひとりよがりのいい方と思うが――。

☆★☆言葉の問題は〝言葉のアヤ〟とすますとしても、このごろどうも私は、審議会とか諮問機関とかいうものに、割り切れぬ思いを抱いている。女性を政策決定の場に――ということで、審議会に女性を送りこむことに女性の運動家たちは懸命になっている。それはそれで結構だが、考えてみれば審議会というのはまことに妙なものだ。とにかく一方的に指名されそんな人は知らない、そんな人がどうしてこの問題を審議するの……といってもどうにもならない。議員なら、ともかく私たち国民が選んだわけだ。一票の重さの差はあっても、当落のカギは国民が握っている。裁判官なら弾劾裁判の道もある。それなのに審議会って一体何なのだろう、そこで決ったことが、本当に国民の総意や〝良識〟を反映しているのか。

★☆☆前・全地婦連会長の故大友よふさんが、米価審議会が終わるたび、「いくら反対意見をいっても、私たちは少数派。はじめから票数は決っているのだから…。むなしくなるけど、だまっているわけにはいかないし…」と嘆いておられたのを思い出す。審議会の制度がいつごろからできたか、諸外国ではどうなっているのか全く不案内で知らないのだが、考える度にあまり、民主主義的でない制度だなと思うようになった。〝女性を送りこむ〟ことだけで、よくなるような簡単なものと見えないのだが――。

やはり良くなるとは思えない」

また、世間一般でとかく犯罪者に人権があるのかという見方がされることに対しては「〝塀の中〟の本当の様子を知ってもらい訴えるしかない」と話した。

海外通信

各国の経験や技術の交換も

田中由美子の国連だより

グループ作業

女性情報センターの強化に関する地域セミナー

エスカップは、去る十二月六日より二十二日まで、バンコクにおいて女性情報センターの強化に関するセミナーを開催した。

先月までは、国連とその関係機関が実施している「女性と開発プログラム」について、シリーズを紹介してきたが、今回は良い機会なので、このセミナーについて報告したい。

☆セミナーの背景と目的

日本では、国立婦人教育会館や横浜女性フォーラムなど、女性センター作りが盛んに行われているが、国家予算の少ない途上国では、とても女性センターのような立派な施設作りまではは予算が回らない。しかし、立派な建物はなくても、既存の人的・物的資源をフルに活用した女性情報ネットワーク作りは近年益々盛んになってきた。

これに伴い、エスカップでは加盟国の要請を受け、一九八六年以降、アジア太平洋地域女性情報ネットワーク（WINAP）作りのためのプロジェクトを実施してきた。このプロジェクトの最初の活動は同年十二月に日本で開催した地域セミナーであった。このセミナーには、エスカップ地域から十七カ国の代表者を招いて、女性に関する情報の流れやニーズについて検討した。セミナーで採択された勧告に基づいて、その後エスカップは、女性に関するデータベース作り、女性統計の収集、人材リストの作成など、地域の情報ネットワーク作りに関する様々な技術協力を実施してきた。

今回のセミナーは、このプロジェクトの一環として、国レベルでの女性情報センターの強化のために、各国の経験や技術の交換を行い、情報担当者に対して必要な訓練を行うことであった。

☆参加者

セミナーには、主に南アジア地域の七カ国から十六名を招いた（バングラデシュ、ブータン、インド、パキスタン、イランからは各二名、ネパールとスリランカからは各三名ずつ）。その他、傍聴者としてタイのNGOおよび、国連機関からの代表者が参加した。

女性情報ネットワークの正式な窓口は、各国政府の婦人問題担当室であるが、ネットワーク作りにはNGOの役割も重要なので、政府とNGOから各々一名ずつ参加者を募った。

☆議題

セミナーの主な議題は、(1)女性情報センターの運営（センターの概念、ネットワーク作り、情報サービスの提供など）、(2)文献および女性統計の収集、(3)女性情報のリパッケージ、(4)データの標準化、(5)コンピューターによる情報管理など、であった。

講義はエスカップ内部や、アジア工科大学および他の国際機関の情報専門家により行われたが、日本からも国立婦人教育会館久長前田瑞枝氏と労働省婦人福祉課内光子氏をお招きし、日本の経験および世界的レベルで開発されている女性情報システムに関して講演していただいた。

☆セミナーの成果

セミナーの大きな成果は、まず第一に、国連の通常の枠から外れて、NGOから約半数の参加者を招くことができたことである。NGOは、情報ネットワーク作りに重要な役割を果しており、NGOとの協調はこの分野の成功に不可欠だからである。

第二に、コンピューターの積極的利用とソフトウエアの相互使用に関する協定を結んだことがあげられる。女性情報ネットワーク強化のためには、コンピューターによる情報管理が今や各国の重点項目となっている。

第三に、「情報のリパッケージ」についての訓練をあげたい。リパッケージとは、情報を必要とする諸々のユーザーに対し、最適な形にして必要充分な情報を提供することである。今回は、パンフレットやニュースレターの形で情報をリパッケージする訓練を主体に行ったが、今後はビデオフィルムの形でのリパッケージも行っていく予定である。

今回のセミナーは、主に南アジア諸国を対象としたが、第二回目は東南アジア、第三回目は太平洋諸国を対象に、引き続き開催する予定である。なお、今回のセミナーの結果は報告書としてまとめ、出版することになっている。（筆者は、国連エスカップ婦人開発担当官、バンコク在住）

「情報のリパッケージ」の訓練で。成果を発表するネパールからの参加者

コンピューターによる情報管理に関する講義を受ける参加者

スリランカからの参加者

毎日グラフ別冊
俳句 HAIKU
芭蕉から現代まで
好評発売中/定価1400円/毎日新聞社
現代彩時記
星・写・火・食・香・旬・豊・住・湯・憩
現代俳人名鑑100人 自選句と近況報告
現代を言葉で撃つ 精鋭18人 近作と俳論
詠う女流燦々21人 女流俳人の現況
■日本人と四季■座談会「俳句は楽し」■旅の俳句をどうぞ■透き通った青春の俳句……
〈劇画〉虚子山脈 虚子/碧梧桐/秋櫻子
〒100-51東京都千代田区一ツ橋1-1 振替東京4-56534

◉はじめて語る出会いから洗礼まで――
加賀乙彦
キリスト教への道
話題の最新刊！
◉『湿原』（大仏次郎賞）『宣告』（日本文学大賞）など、数多くの名作を世に送りつづける著者の、洗礼までのかくれたエピソードや、創作上の秘密は、興味がつきない。加賀ファンにはもちろんのこと、その深い人間愛は、どなたにも感銘をあたえる。
＊A5判上製／定価1000円〒250
みくに書房
急ぎの電話注文は、03(813)7151
〒112 東京都文京区後楽2-22-15

あゆみ出版
家庭・家族を考える
いま家庭で何が起こっているのか、家庭を破壊している原因は何か？
塾とクラブ漬けの子ども、単身赴任やカプセルホテル泊まりでクタクタの父…。あなたのご家庭はどんな悩みがありますか？
『わが子は中学生』'89 1月臨増号 定価680円
中学生の勉強法 正続
入学・進級のプレゼントに。
苦手教科克服法、塾・クラブとの両立、参考書の選び方、受験突破勉強法など、中学生の勉強法のすべての悩みに応えるベストセラー。
定価各980円●プレゼントケース入り1960円
〒112東京都文京区春日2-17-3 ☎(815)5511

農文協
●内容見本呈（社）農山漁村文化協会
東京都港区赤坂7-6-1
電話03(585)1141(代)
この国は恐ろしい国
――もう一つの老後――
●全国婦人新聞編集長 関千枝子 日本エッセイストクラブ賞 日本ジャーナリスト会議賞受賞作家 著
大反響！たちまち3刷！
日本は本当に〝豊か〟な国なのか？
低賃金にあえぐ 母子家庭の現実を、
宇都宮の〝子殺し〟の母事件
札幌の母親〝餓死〟事件の現場をたずね、
実態をさぐる 著者渾身のルポルタージュ！
●久場嬉子（東京学芸大学教授）氏との対談〝貧う福祉〟を貧える人々・貧えない人々――も収録。
豊かな国の貧しい福祉！どうなる？女の老後！
●定価1300円 送料250円
★こんなお店はもうけていい！良い物を求めるこだわりのお店屋さん 街角のショッピングサイエンス ●1100円
農文協文化部編　お店屋さんから20の提案
★飽食と粗食の波間に揺れる食文化の崩壊時代の、アンチ・グルメ辞典 食卓のパロディ ●1300円
山路 健著　前「食の科学」編集長の辛口文明批評
★ガン死亡率の地域差の要因調査から得られた成果をもとに説く 野菜はガンを退ける ●1100円
加美山茂利・東畑朝子著　簡単野菜料理94種も紹介
★長所と短所のデータ満載！薬膳食法による素材の生かし方も紹介！ 食べものメリット・デメリット事典 ●1200円
川嶋昭司・能宗久美子著　付録＝各種栄養素の基礎知識
★更年期の方はもちろん若い人にも多い〝冷え〟の総合的対策を解説！ 万病を治す冷えとり健康法 ●1000円
進藤義晴著　〝頭寒足熱〟は大事な健康の基本
★蛇口の向こうの裏話しから説き起し、体内と体外の〝水〟を大検証！ 飲む水出る水 水の健康法 ●1000円
河野友美・安田三弥・太田雅子著　水、ミネラル、みずの話

いま、女と男のココが知りたい

〝職場は変わったか〟

講師に弁護士 中島通子さん 均等法三年目迎えて

東京・中野区婦人会館で好評の総合講座

今、東京・中野の婦人会館では、女のココが知りたい、労働者という総合講座が毎月の夜、開かれている。この講座は、いろいろな職場、仕事場の、男と女の問題を、労働問題、雇用問題、福祉問題、婚姻問題、家庭問題、健康問題、教育問題、性問題などを、「ともに学ぶ」ことを目的として、毎月、講師を招いて、講座を開いている。現在、開かれている労働講座は、労働問題、婚姻問題、雇用問題、福祉問題の四本。「ともに学ぶ」ことを通じて、女と男のココが知りたい、労働者という総合講座の模様を、ルポする。

中島通子さん

男女雇用機会均等法施行（1986年）から、三年目。「ひとりで悩んでいるのは、私だけじゃない」と、職場での悩みを、仲間と共有したい、という女性たちが、今、増えている。

均等法施行によって、これまでどうなったか、職場は変わったか、という問題意識を、女性たちは、持っている。

「均等法は、女性の職場を、どう変えたか」、「均等法の、問題点は、何か」、「均等法の、問題点を、どう、改善していくか」、「均等法の、問題点を、どう、改善していくか」、「均等法の、問題点を、どう、改善していくか

男女共同参加の社会を

女性が時代を変えよう

盛りだくさんなプログラム　一千三百人が参加して

二日、千葉県文化会館ホールで、「ちば女性フォーラム」が開かれた。二十一世紀を展望し、男女共同参加型の社会づくりをめざそうと開かれたもので、トーク「くらし生き生き、男がいて、女がいて」や、海外の実状を学ぶためにアメリカ・カナダに派遣された女性（婦人のつばさ）の報告、「女性の社会参加に関する提言文募集」の入賞者発表・表彰式、フランソワーズ・モレシャンの講演など盛りだくさんの内容だった。

21世紀を展望する「ちば女性フォーラム」

農業と漁業が中心だった千葉県は、二十一世紀に向け、新しい産業都市に生まれ変ろうとしている。東洋一の規模と設備を持つ幕張メッセ（国際展示場、国際会議場、大ホールなど）の建設（十月にオープン）、木更津と川崎を結ぶ東京湾横断道路、幕張新都心計画などが急ピッチに進められている。この新しい街づくりに、女性たちが積極的に参加していくためには、また、男女がいい関係で共に社会参加するためにはどうすればよいかを、みんなで考えようというフォーラムで、県内の女性たちが約二千三百名（男性十名）が参加した。

トーク「くらし生き生き、男がいて、女がいて……」は、国際舞台で生き生きと活躍しているジャーナリストの下村満子さん（朝日新聞社で、ニューヨーク特派員などを経て、現在編集委員。女性では初めての、国際記者賞を受賞。ハーバード大学ニーマン特別研究員＝'87～'88年）と、主夫（婦）の経験を持つ村瀬春樹さん（フリーライター。ドキュメント映画製作、ライブハウス吉祥寺「ぐゃらん堂」を主宰）。司会は、弁護士で千葉県婦人問題懇話会座長でもある渥美雅子さん。

妻も夫も、それぞれが経済的自立しているというのが三人の共通点だ。

「妻が働くのを、心よくは思ってなかったのだろうが、決して働くなとも、それでケンカしたこともなかった」という下村さん。その夫が、自分の仕事を理解してくれ、協力的な態度を示すようになったのは、下村さんが四十度を越す高熱を出しながら原稿を書いている姿を見てからだという。会社なら病気の人に替って誰かが仕事をこなしていく。しかし、原稿を書く仕事は、取材した本人しか書けない。〝大変な仕事をしているんだね〟といいながら、一晩中つきあってくれたという。

特派員の単身赴任や留学の話に逡巡している時、〝行けよ〟と夫の方が勧めてくれた。「いまは、夫婦というより、職を持つ同志という感じ」。

村瀬さんは、「うちは逆に議論だらけ。意見が違うと徹底的にやる。対立しつつ同勤（同じ仕事をする）する形です」。

九年前、村瀬さんは会社勤めをしていた。妻子を養うため典型的な働きバチだった。ある日、パートナーに〝私はあなたの母親でも召使いでもない。私も働きたい。私が仕事が出来ない最大の原因はあなたなのョ〟といわれてカルチャーショックを受ける。さらに〝本当に男女が平等なら、どちらが外に出て働いてもいいのでは？〟といわれて主夫になった。「彼女は、自分の人生計画を持っており、それを男と同じように実現する権利があると考えている女性。自分がパートナーとして選んだ女性が望む事を、正面から受け止めなければフェアでないと思ったから」

下村さんも村瀬さんも、働きたいという妻の気持を認めること、その根底にあるのは、愛情であり思いやりだという。

「以前男たちは、無理に優しくするか、恐怖で出るか、無視するかの関係でしか妻と結べなかったが、最近はナチュラルに連れ合う男たちが出てき始めている」（村瀬さん）

アメリカでは、一九七〇年代にウーマン・リブの運動が盛んになり、女たちは家から外に向って動き始めた。そして、離婚率が高くなった。離婚した男性の八〇％は、妻の方に捨られた格好だ。その男性たちは、働くことに夢中で、妻の中に芽生えた価値観の変化や女性にも自分の人生を歩く権利があることなど、考える暇さえなかった男性たちだ。

「離婚して週末だけ子供に会う権利が与えられて、子供と正面に向あってつきあうようになり、初めて父性愛に目ざめる。これほど楽しい子育てを女に奪われていたのか、男にも子育ての権利をよこせというメンズ・リブの運動が始まる。男性と女性が逆転したような型になったのです」（下村さん）

村瀬さんは、「これからの社会は、中・高年層が自分の生活を変えねばならない必要性にせまられてくる」といい、男が家庭責任をもつ方法には二つある。一つは、いま勤めている会社をやめる。もう一つは、男が育児休暇を取ってもおかしくないような職場に変えていくこと。女性は、なぜ自分が自立できないかでなく、どうやったら自立できるかを考えること。できないという愚痴のエネルギーを、社会的な闘いのエネルギーに転換していくことが大切、という。

下村さんは、個人にできることと社会全体が変わらねばどうにもならないことがある。リクルート事件にみるように、男の社会は崩壊しつつあり、今こそ女の力を結集して、外に向って働きかけていく必要がある、と。

最後に、渥美さんは「夫を変えるのも、社会の仕組を変えるのも女のかい性。女性がリーダーシップを取って囲わりを変えていく時代になりつつある。それを担うことが女のかい性として、求められている」と結んだ。

向って右から下村さん、村瀬さん、渥美さん

会場は2,300人の女性と10人の男性でぎっしり

最優秀賞に茂木さん

女性の社会参加に関する提言文

茂木道子さん

男女共同参加型社会形式の方向を探るため募集した「女性の社会参加に関する提言文」には、九十七人が応募。

最優秀賞に高齢化社会に関する分野で応募した、茂木道子さん（佐倉市）の「〝エプロン〟の活動を通して」が選ばれた。

茂木さんは、「高齢化社会を住みよくするには、〝縦横に織りなす人間関係のあり方〟にかかわっているのではないかということを書いた」という。

将来、気軽に安い介護を受けたいという思いをもった女性たちが集って、相互扶助を目的としたエプロンの会をスタートさせた。

「老人がちょっとした手伝いをやってもらいたいと思っても、シルバー産業か家政婦を利用するしかない。その家政婦も一、二時間という短時間ではイヤがる。買物とか病院への付添いがあれば、最後の日まで在宅でやれる。エプロンは、一日に数時間お年寄りのお手伝いしようという会です。かつては、子が親をみるという縦の人間関係で介護できたが、いまそれが難かしくなり、横の人間関係の広がりが必要になって来ています」

相互扶助といっても、老人に返してもらうことはできないので、現在は片側からの手伝いになっている。一日に一～二時間の短時間の手伝であってもほぼ半日がつぶれてしまう。

「どこからも利益が出ない、効率の悪い仕事だけと必要なものです。せめて行政が事務所とか電話とかハードな面を担って欲しいと提言の中で訴えました」

手伝う時間より、そこに行く時間の方が長いことがある。誰もがこの運動に参加すれば、エプロンがけでいける隣の老人を、一日数回手伝うことができる。地域の中に、こうした連帯感が育てば、もっと住みやすい社会になり、高齢化社会への不安もなくなる、と茂木さんは語る。

その他、優秀賞五名、優良賞五名が選ばれた。

昭和62年歯科疾患実態調査から③

「フッ化物塗布」は増加

毎日歯を磨く人は93％に

いよいよ、『昭和62年歯科疾患実態調査』（厚生省健康政策局歯科衛生課）の最終回です。

今回は、「フッ化物の塗布状況」「歯ブラシの使用状況」についてお知らせします。

【フッ化物の塗布状況】

十五歳未満で、フッ化物塗布を受けたことがある人は、31・55％です。この年次推移を見ると、1989年では、わずか6・03％でしたが、その次の調査では、11・22％、前回調査では22・28％と、調査のたびに増えています。

実施した場所は、保健所が、7・98％。その他の場所が23・56％。しかし、受けたことがない人は、56・18％います。

【歯ブラシの使用状況】

歯ブラシの使用状況の総数で、毎日みがく人は、93・20％。年齢別で見ると、20歳～29歳が一番高く、98・48％。次いで、30歳～39歳が97・61％。40歳～49歳が97・05％。時々みがく人は、総数では5・55％、みがかない人も、1・25％います。

毎日みがく人は、調査をするごとに増え、特に1歳～4歳の年齢層の増加が顕著です。

毎日みがく人の回数の内訳は、2回の人が一番多く、41・66％、次いで1回の人が38・55％、3回の人も12・99％います。しかし、これを年次推移で見ると、1981年には1回みがく人が一番多く46・40％で、次いで2回みがく人が36・57％でした。今回の調査で、はじめて、2回みがく人が1回みがく人を超えました。

この調査では、歯の寿命についても調べています。

歯の平均寿命で最も長いのは、男性では、下顎左側犬歯で、62・0年、女性は下顎右側犬歯59・1年です。

最も、寿命が短いのは、男女ともに下顎左側第2大臼歯で、男性は43・3年、女性40・9年で、最も、寿命の長い下顎左側犬歯と、同第2大臼歯では、18年以上も差があります。

年次推移で見ると、どの歯種でも1975年と比較すると、歯の平均寿命が2～5年伸びています。

三回にわたって、調査の結果を紹介してきましたが、みなさんは、これをどのように受け止められたでしょうか。

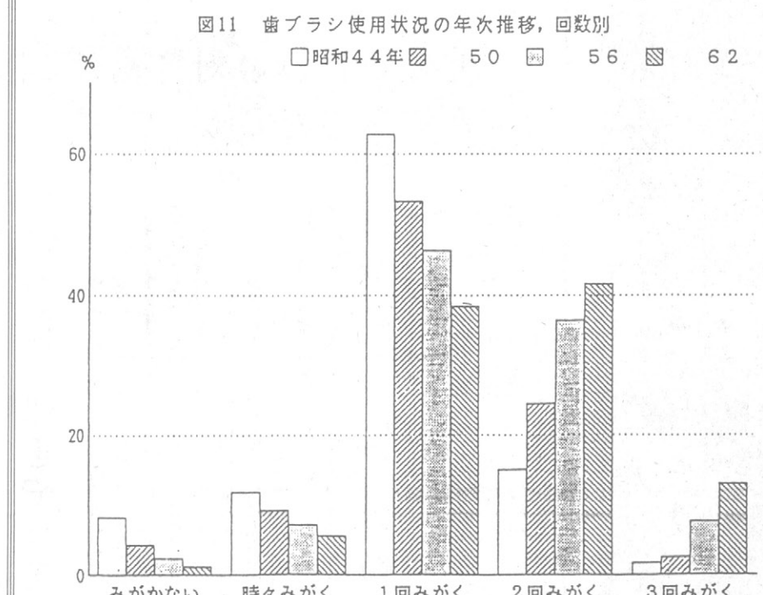
年を追うごとに、歯の衛生に対する関心が高まっていることは確かです。しかし、歯周疾患など、いわゆる〝中高年〟におきやすい疾患が、多いことも現実です。

「どうせ、将来は総入れ歯なんだから」とあきらめないでほしいのです。

日本人の寿命は、年々のびています。一日でも長く、自分の歯で、一生楽しいグルメができるのも、自分自身の心がまえ次第なのです。

（資料提供・ライオン歯科衛生研究所）

図11　歯ブラシ使用状況の年次推移，回数別



「続 怒りの三宅島」

三宅島のたたかいを記録する会が製作

NLP基地設置に反対

一九八七年、NLP基地設置に反対し、闘う東京・三宅島の人たちの生き方を伝えるドキュメント・フィルム「怒りの三宅島」が、「三宅島のたたかいを記録する会」の手で製作された。このフィルムは、その現場ルポルタージュの第二弾である。

八七年九月一日、島民の激しい反対運動にもかかわらず、島内に、機動隊導入により、観測鉄柱が強行設置、島民八人が不当逮捕された。

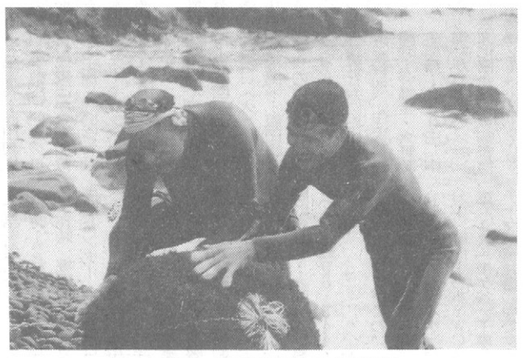
この出来事――事件のあった日をきっかけに、島の人たちの気持ちが、どう変わっていったのか、カメラは、島の人たちの生活、自然、反対運動への取り組みを追っていく。

島の自然が、とりわけ美しい。あくまでも澄んだ遠い空と、コバルトブルーの海でサンゴに群れるスズメダイ。深い森林の中に毅然と花を咲かせるラン。早足で歩きながら虫をついばんでいくアカコッコや、常緑樹の繁みで羽をやすめるカラスバト、そしてウグイスのさえずり……。

こうした自然と歩調を合わせるように、島の人たちは、農業や漁業を営む。暖かい日射しの降り注ぐ山の斜面でキヌサヤを摘むやさしい手、息をつめて、トコブシを求め一気に海に潜る躍動する身体、真夏の太陽の下で、テングサを干す忍耐強い背中、そして、岩のりを巧みにかきとるたくましい腕…。

島の生活は、ゆったりとしているけれど、噛み合わないことを知らない、大きな歯車に似ている。私たちが忘れかけた、生命の営みを、三宅の人たちは知っている。彼らが基地反対に流す涙の意味を、改めて考えさせる。「ここに絶対、基地はつくらせません」という言葉が心にしみる。（16㎜カラー48分　橋祐典監督、「三宅島のたたかいを記録する会」製作）

☆フィルム販売・貸し出しの問い合わせ…「共同映画株式会社」☎03・463・8245（東京）、☎022・225・0986（仙台）


採った〝テングサ〟を陸にあげる漁師

てんらん会

「かけがえのない日々」

◆「上野泰郎展」
会期…2月3日（金）～15日（水）10時～19時　※木曜休館
会場…西武アート・フォーラム（西武百貨店池袋店8階）
内容…74年の第1回創画会出品作から新作まで、「いのちの讃歌」「かけがえのない日々」など代表的な大作34点を紹介　入場料…一般400円（300円）、学生300円（200円）、○内は前売り・団体20名以上料金

◆神の機械・コミュニケーション「トーマス・バイルレ『高密度集積絵画展』」
会期…2月10日（金）～28日（火）10時～19時　※水曜休館、2／24日（金）臨時休館　場所…シブヤ西武シード10階＝シードホール　内容…バイルレのコンピューターコラージュやシルクスクリーンによる新作、集合シリーズ30余点を紹介。本人も来日し、2／12（日）に公開シンポジウムを開く　入場料…一般800円、学生500円

◆「カレル・アペル展―ほとばしる精神の風景―」
会期…2月11日（土・祝）～3月7日（火）※木曜休館　会場…西武美術館（西武百貨店池袋店12階）　内容…前衛運動「コブラ」の代表作家の日本初の回顧展。油彩画61点、彫刻・レリーフ12点、ドローイング20点によって、アペル40余年の足跡をたどる　入場料…一般900円（800円）、大・高生700円（600円）、中・小生400円（300円）（　）内は前売り・団体20名以上料金

美容

春のリップメイク

口紅の色の変化で演出を

今年の春は、明るく鮮やかな色が流行するようです。豊富な色の中から自分の色を選び出し、何本かの口紅を効果的につけ変えて、その時々にふさわしい生き生きとした表情を演出する。これが今春のリップメイク傾向です。そのポイントを――。

一日に何回か口紅の色を変えて、その都度美しく仕上げるコツは、同系色の口紅で明度（明るさ）・彩度（鮮やかさ）や質感を変えることです。

口紅には大別してレッド系、ピンク系、オレンジ系があります。明度が高く彩度は低いソフトな発色のものは、健康的で爽やかな印象になります。

また明度・彩色ともに中位の発色のものなら、やや知的でしかも優しさも感じさせます。彩度も明度も高くなると色がシャープにきわ立ちますから、大変華やかな印象になります。

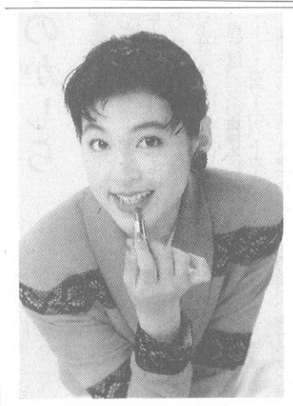
さらに質感を変えるグロスタイプの口紅を重ねぬりして、より微妙な雰囲気をつくり出せば、口紅の楽しみは無限に広がると言っても良いでしょう。

口紅でイメージチェンジをする際、目もとと口もとのポイントメイクは、口紅と同系色で仕上げると失敗しません。

夜、化粧料をおとす時には、まず口紅のクレンジングから。唇にクレンジングクリームをらせんに描きながらのばして口紅を浮きあがらせ、ティッシュやコットンで拭き取り、それから全体のクレンジングを。

唇は皮脂腺や汗腺が無く、とても乾燥しやすい部分です。口紅をきれいにおとした後、トリートメント効果の高いリップクリームをつけていたわることも忘れずに。

（資料提供　カネボウ化粧品）


口紅の色にも変化を

MORE-TASTY

楽しい家庭料理の世界をひろげる　ハウス食品

一緒だと、おいしいね。

家庭料理は、もっともっとおいしくなる。
〝みんなで作って、一緒に食べる〟。これこそ、家庭料理のおいしさですね。主役は、家族。ベースは、ハウス食品におまかせください。個性あふれる豊富なメニューで、おいしくたのしい家庭料理の世界をひろげます。

ひとつの出会いから、おいしさが生まれる。
たとえば、カレールウ。肉や野菜と出会うことで、はじめておいしさのハーモニーを奏でます。製品づくりも同じです。ハウス食品は、お客さまの声やニーズに応えることから、新しいおいしさが生まれると考えています。

皆さまとともに、おいしさを考える、ハウス食品。
ハウス食品は、単なる製品づくりだけでなく、食卓や食生活をひろげるおいしさを提案しています。――おいしく、たのしく、健康に。これからも、皆さまと一緒にたのしい家庭料理の世界を広げていきます。

明日は、もっとおいしくなる。